

林京香さん、高校合格おめでとう

名古屋在住の林京香さんが高校に合格した。写真は 25 日午前の合格発表後の投稿に掲載されたものだ。人工呼吸器ユーザーの京香さんは、地域の中学校を卒業して、高校受験に挑んでいた。京香さんが小学 2 年のときに、大学で偶然知り合い、それ以来、ご家族を含めて交流を続けてきた。私の「最終講義」にも来てもらった。京香さんとご家族、仲間の人たちから多くのことを学んできた。



京香さんが小学生の頃、運動会・学芸会などを見学に行った。学校やクラスの中で、京香さんがすっかりとけ込んでいるのを実感できた。3 年前に大阪に転居したので、中学時代のことはほとんど知らないが、友だちや教職員、ヘルパーさんらに支えられて元気に通学していたようだ。そして中学を卒業して、難関の高校受験となり、「合格」の 2 文字を手にした。これからも困難を乗り越えて、充実した高校生活を送ってほしい。

写真は 2018 年 9 月に愛知県刈谷市で開催された「第 13 回障害児の高校進学を実現する全国交流会 in あいち～いっしょに行こまい！高校も！」の全体会で司会を担当したとき。このとき京香さんも講演などを熱心に聴いていた。当時書いた集会レポートの一部を紹介したい。



1 日目の全体会では、寺脇研さんが「私が実現した高校の希望者全入～適格者主義の呪縛を超えて」と題して記念講演した。寺脇さんは文部省在職中、「ゆとり教育」推進に大きな役割を果たし、広島県教育長として出向中に、広島県の県立高校の希望者全入を実現させた。記念講演では、希望者全入の経験をリアルに語った。高校教育無償化などの動きもあり、希望者全入の流れは続いているが、それを邪魔する動きとして「全国学力テスト」を挙げる。適格者主義は、学校が英語・数学といった主要教科を中心に組み立てられていた時代の反映だ。AI が急速に発達し、学校のあり方も変わっていく中で、適格者主義の呪縛からも解き放たれるだろう。

全体会のあと、4 つの会場に分かれて分科会が行われた。とくに第 4 分科会、「障害児だけではない」高校に行けない子どもたちは、本集会のテーマに即して設けられた。寺脇さんも第 1 分科会に参加して、次のようにコメントした。地域により違いはあるが、「定員内不合格」という現実を前に、障害当事者だけでなく、教員や行政が問題に正面から向き合うこと。障害をもつ子の「学びたい」という意思こそが大切だ。高校の定員割れが問題になっており、そのなかで、なぜ「定員内不合格」という事態が起こるのか。適格者主義の呪縛から抜け出すことが求められる。

(2021 年 3 月 27 日)